研 究 代 表 者	所属学系・職名　人間・生活学系　准教授 氏　　名　髙 橋　　純 一
研 究 課 題	障害児をもつ家族に対する障害理解教育が障害受容に及ぼす影響 Effects of affirmative attitude on understanding disability.
成 果 の 概 要	**＜目 的＞** 障害児は、基本的生活習慣（排泄・着替えなど）が身についていなかったり、奇異な行動（衝動的な暴力など）をしたりする。養育者は、何度教えても行動修正されない子どもを見て、大きなストレス状態に晒される。 本研究課題の目的は、養育者に対して障害理解教育（肯定的態度の習得：ペアレント・トレーニング）を実施することで障害受容の形成およびその変容過程を明らかにすることである。ペアレント・トレーニングとは、親を対象に子どもの養育技術を獲得させるトレーニングである（大隈・他, 2005）。井上・他（2014）は、「ほめ方指導」に関するペアレント・トレーニングを実施した。その結果、指導の前後で保護者の抑うつ傾向は減少するが、養育スタイルには変化が見られないことを報告した。ペアレント・トレーニングには、子どもや自分の客観的捉え直しの効果がある（佐藤・他, 2010）。客観的捉え直しは「かく」ことで促進されると考えられている（吉村, 2000）。「かく」ことにより、自己を客観的に捉えることにつながり、他者との会話も活性化する効果がある。本研究では、自由記述（かくこと）の観点から肯定的評価を実施し、障害児をもつ保護者の養育スタイルの変容について実験的検討を行なった。 **＜方 法＞** **調査参加者**：人間発達文化学類特別支援クラスで継続的に実施されている障害幼児教室に通う養育者（および家族）を対象とした。 **手続き**：親教室が開催されたうちの 5 回を対象とした（2015 年 10 月～2016 年 1 月）。1 回目に、養育者の養育スタイルに関する質問紙（養育スタイル質問紙：松岡, 2011）を実施した。1 回目～5 回目において、療育場面における子どもの様子を観察し、肯定的に捉えるための自由記述課題を実施した。子どもの良い点（褒めたい点）について、なるべく多く記述するように教示を行なった。5 回目に再度、養育スタイル質問紙を実施した。 **質問紙**：松岡・他（2011）の養育スタイルに関する質問紙を用いた。回答方法は「全く当てはまらない（1 点）」から「とても当てはまる（5 点）」の 5 件法であった。質問項目は、「肯定的働きかけ」、「相談・つきそい」、「叱責」、「育てにくさ」、「対応の難しさ」の 5 因子から構成される。

成 果 の 概 要

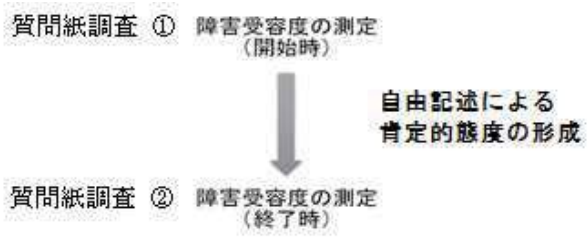

図. 本研究の手続き

＜結果と考察＞

質問紙の各因子において、養育スタイルの変化を検討するために観察前後［観察前 v.s. 観察後］を変数とした *t* 検定を実施した。**肯定的働きかけ**：観察前後の評定値について有意差が得られた［$t(5) = -2.71, p = .042$］。観察後の方が観察前よりも評定値が上昇した。**相談・つきそい**：観察前後の評定値について有意差は見られなかった［$t(5) = -0.25, p = .809$］。**叱責**：観察前後の評定値について有意差は見られなかった［$t(5) = -0.24, p = .822$］。**育てにくさ**：観察前後の評定値について有意差は見られなかった［$t(5) = -1.58, p = .175$］。**対応の難しさ**：観察前後の評定値について有意差は見られなかった［$t(5) = -0.34, p = .75$)］。

分析の結果、療育場面観察後の方が「肯定的働きかけ」の得点が高くなった。療育場面観察と子どもに対する肯定的態度の形成が養育尺度の「肯定的働きかけ」に影響を与えた可能性が推測される。このことから，子どもを肯定的に評価することが、養育スタイルを変化させる可能性を示唆する。

＜まとめ＞

本研究では、養育者の養育スタイルについて、子どもに対する肯定的評価が養育スタイルに及ぼす影響を明らかにした。調査の結果、子どもに対する肯定的評価が養育スタイル尺度の「肯定的かかわり」の得点を高めたことが分かった。保護者に子どもに対する肯定的評価を促すことが、保護者の養育スタイルを良い方向に導くと推測できる。

本研究で変化が見られたのは「肯定的かかわり」についてのみであり、もっと長期的な関わりを行い、その他の 4 つの因子に対する影響についても検討する必要がある。また、保護者に対して自分の養育スタイルが変化していることを実感として得られているのか調査を行うことで、ペアレント・トレーニング参加の意義についても明らかにできると考える。

成 果 の 概 要

表. 各因子における評定得点の変化

	肯定的働きかけ	相談・つきそい	叱責	育てにくさ	対応の難しさ
1回目	3.35	3.26	3.53	3.08	3.33
5回目	3.54	3.24	3.54	3	3.44

＜引用文献＞
井上菜穂・井上雅彦（2014）育てにくさを感じている親に対するペアレンティングの効果,発達研究, 28, 13-20.
松岡弥玲・岡田涼・谷伊織・大西将史・中島俊思・辻井正次（2011）養育スタイル尺度の作成：発達的変化と ADHD 傾向との関連から，発達心理学研究, 22（2）, 179-188.
大隈紘子・伊藤啓介（2005）：肥前式ペアレント・トレーニングプログラムAD/HDをもつ子どものお母さんの学習会，二瓶社
佐藤正恵・植田映美・小川香織（2010）ADHD 児の保護者に対するペアレント・トレーニングの有用性について，岩手大学人文社会科学部紀要, 86, 27-40.
吉村匠平（2000）「かくこと」によって何がもたらされるのか？―幾何の問題解決場面を通した分析―，教育心理学研究, 48, 85-93.